

アイデンティティにもとづく考えが悪用されるとしたら、解決策をどこに見出せば良いのか、という筆者の問いは、アイデンティティが矛盾する二つの側面を持っていることから発せられている。一方で、アイデンティティを共有することで、隣人や同胞との連帯や助け合いを可能にするものとみなす理解がある。他方で、筆者が例示しているように、アイデンティティによる結束は、アイデンティティを共有しない人たちに対する拒絶を生み出すものでもある。このようなアイデンティティがもつ両義性が、アイデンティティに基づく社会を作っていくことも、アイデンティティを否定することもできない、というジレンマを生じさせることになる。

これに対して、そもそも、アイデンティティを共有する集団は、個人にとって一つだろうか、という問いを立てることができる。例えば、男性で、労働者で、ユダヤ教を信じているアメリカ人がいる一方で、女性で、会社を経営していて、イスラム教を信じているアメリカ人もいるだろう。この人たちは、アメリカ国籍を有しているという点で共通しているが、宗教が異なれば、帰属する宗教団体は異なる。経済力の格差があれば、必ずしも互いの集団でいごちの良さを感じることができないということも私たちは日常的に経験している。一人の人が、女性というアイデンティティを持ち、社長というアイデンティティを持ち、イスラム教徒というアイデンティティを持ち、アメリカ人というアイデンティティを持つ。こう考えると、一人の人が複数のアイデンティティを共有する集団に帰属しているということがわかる。一人の人間が、複数性を持っていることを重視すれば、あるアイデンティティを共有しない集団の人たちの中に、別の側面で連帯できる可能性を見いだすことができるのではないか。そうすれば、完全に排他的になることはできなくなるのではないだろうか。

一つのアイデンティティに基づく集団への帰属のみを絶対視しないこと、絶対視しない社会を作っていくことが、著者の問いへの一つの解決策になりうるのではないだろうか。